平成 22 年 11 月 30 日

平成 22 年度大学職員情報化研究講習会～応用コース～

第 5 分科会「情報活用の重要性と情報システム部門の役割」事後レポート
第 3 グループ　情報資産管理運用のあり方　～学内のデータバンクを目指して～

辻川淳一（龍谷大学）、増澤耕二（東海大学）、音喜多光一（日本電気株式会社）
白武和美（武庫川女子大学）、柴崎一（西南学院大学）、田尻雅裕（京都産業大学）
荒谷宏美（和光大学）、竹下善史（酪農学園大学）

18 歳人口の減少により、各大学では定員割れが発生し、私立大学は淘汰の危機を迎えている。また、各大学は自己点検・評価や、より透明性の高い第三者評価を実施することで、大学の質の保証・向上を図っている。平成 23 年 4 月 1 日施行予定の文部科学省大学設置基準の改正では、「学生が社会的および職業的自立を図るために必要な能力を培うための体制を整えるものとする」という内容の条文が加えられ、学士力、就業力といった人材育成の改革、いわゆる大学改革が、国や社会から強く求められている。大学を取り巻く社会的環境がこのように変化していく中で、今後は「情報資産の戦略的活用」が必要不可欠である。そのため、情報システム部門においても、システムの運用管理だけを行うのではなく、経営的視点から情報資産の運用管理を行う必要に迫られている。

我々は求められる役割の実現に向けて、まず大学における情報資産の洗い出しを行った。そして、情報資産の活用に関して、情報システム部門からみた管理運用のあり方と利用者のニーズ双方の現状分析、比較・検討を行なった。

その結果、情報システム部門から見た情報資産管理運用のあり方としては、大きく分けて「適正な管理」「安全・安心」「セキュリティ」という 3 つの柱がある。1)「適正な管理」とは例えば、ライセンス管理や機器の管理の他、データの信憑性を保つこと等が挙げられる。2)「安全・安心」とは、システムの安定稼動、障害時の迅速な復旧等を意味している。3)「セキュリティ」とは、適正なアクセス権限の設定や、ポリシーの策定・共有等が挙げられる。これらのことから、情報システム部門は、情報資産の保護と運用に重きを置いていると言える。

一方、利用者のニーズは立場によって様々である。学生は、休講情報や、成績、試験、就職、アルバイト等、大学生活・人間形成に関わる情報を求めている。これには、社会に出て活躍できる人材になりたいとか、大学に行くことで変わりたい、有意義な学生生活、仲間作りをしたいといったような潜在的要求がある。

また教員は、研究業績等の教育・研究情報、シラバス、履修、成績等の学生支援情報、サークル、ボランティア活動等の学生生活支援情報を求めている。職員は、学生生活支援の他、教務、学生、法人等、各部署の業務遂行に必要な情報を入手・共有する必要がある。教員、職員の両者は、共に教職協働の連携を高め、学生状況の把握、教育研究効果の向上を図りたいという目的がある。

これに対し、学生の保護者は、子息の状況（履修、成績、出欠、学生生活等）がまず何よりも気になるはずである。我が子は、きちんと卒業できるのか、就職できるのか、健康状態はどうなのか、将来の人生設計はどうなるのか。また、我が子を預けるに値する大学なのか、環境はどうなのかといった大学の情報も知りたいと考えられる。

これらのことからわかる通り、利用者の立場によって必要な情報や利用目的は多様化しており、

エンドユーザは、必要な時に必要な情報を自由に見たいのである。

では、利用者のニーズを満たすために情報システム部門に求められる役割は何であろうか。我々は、現状分析の結果を基に検討を行った。

まず大前提として、情報システム部門が検討しなければならない課題は以下の 3 点である。

1. どのように情報を管理するか
2. どのような形で情報を提供するか
3. どのように業務の省力化を図るか

これらは日常業務を遂行する上で、当然検討しなければならない永遠のテーマとも言える。しかし、既に述べた通り、大学改革が求められ、さらにステークホルダのニーズも多様化している昨今においては、情報システム部門はさらに一歩進んだ役割を担う必要があると我々は考える。それは、「多種多様な情報資産を収集、管理、提供」することである。最新情報をスピーディーに提供できる体制を整えそれを実現することで、大学の経営戦略上、新たな“気づき”（＝戦略）を生み出すことができる。情報システム部門は、“気づき”の機会創出を行うべきである。言い換えるならば、我々情報システム部門は、これまで大学内で実現できていなかった情報資産活用の推進と大学経営における ICT 戦略を担うコンサルタントにならなければならない。

そのために、情報システム部門は、まず他部署と連携をとる HUB の役割を担う必要がある。そして、従来ありがちな縦割り組織で各部署毎に独自にデータを抱え込む形からの脱却を図らなければならない。情報システム部門が大学のデータバンクとして、各部局、ステークホルダから情報を収集・管理し、その中から複数の情報を組み合わせて多角的な情報を生成し、必要とするステークホルダへ提供（還元）する。このように、情報の流動化と複数のデータを組み合わせたデータ分析を行い、大学経営における戦略的意思決定の判断材料とすることで、大学が変革していくための“気づき”の機会創出が可能となる。

大学のデータバンクとしての機能を維持するためには、情報システム部門の意識改革はもちろん、現場の構成員である職員全体の意識改革、教職協働の取り組みが必須である。情報システム部門は、従来の「システムの安定稼動」という視点から新たに「情報資産の戦略的活用のためのコンサルティング」という視点への転換が急務である。また他の職員は、情報システム部門の新しい役割に対する理解、協力と、正確なデータの入力、提供が必要である。

また、情報システム部門は、最新の ICT 技術や他大学の事例、過去のシステム構築、イニシャル・ランニングコスト等、自身が持つ様々なノウハウや情報セキュリティポリシー等を踏まえた上でイニシアチブを発揮し、ユーザーからのヒヤリング・内部調整を行い、場合によってはベンダーに相談する等して、最適なシステム、ソリューションを利用者や経営層へ提言する役割も担う。利用者にとっては、信頼される町医者的な存在でもあり、経営層にとっては、共に戦略的に情報システムの構築を行う大学経営支援パートナーとしての役割が今後期待されるであろう。

私達は日々、システム管理運用のみの業務にとらわれ、副次的データ活用のことを忘れがちになる。これからの大学は、データ収集・集積・分析を行い、各課等への相談的役割も持ちあわせ、眠っているデータの中から「宝物」を見つけ出し、大学経営の戦略的支援機能を持つことも情報システム部門の本来的な重要な業務の一環とする必要がある。大学の情報活用は、『情報は活用すれば宝の山　活用しなければただのゴミ！』である。今回討議した内容をメンバー各々が持ち帰り、今後の組織のあり方や情報活用の進め方について、大学内で情報共有を図り、問題提起することが、大学改革に向けての第一歩となるであろう。